

クリスマス・ドラマスペシャル

チャールズ・ディケンズ原作 横山ゆずり脚色

## 「クリスマス・キャロル」

(音楽) (クリスマス曲)  
(効果音) (教会の鐘の音)  
ナレーション それは凍えるように寒い、冬のある日。まだ3時を過ぎたばかりだというのに、辺りには深い霧が垂れ込めて、すっかり暗くなっていました。街行く人はだれも、コートのをりを立て、身を縮こめていましたが、その表情は皆、どことなく晴れやかでした。と言うのは、明日はクリスマスなのです。——と、通りの向こうから、一人の男が急ぎ足でやってきます。

(効果音) (ドアをノックし、開け、締める音)  
フレッド クリスマス、おめでとう、スクルージおじさん！  
スクルージ なんだ、フレッドかい。めでたいだって？ ふん、バカバカしい。そんなこと言いに来たのかね。  
フレッド バカバカしいですって？ まさか本気じゃないでしょうね、おじさん。  
スクルージ 本気だともさ。貧乏人のくせに、クリスマスの祝いなんざ。めでたいのはお前さんの頭のほうだろうよ、フレッド。  
フレッド まあそうプリプリしないで。いくら金持ちのスクルージおじさんでも、せっかくのクリスマスに独りじゃつまらないでしょう。ぜひうちに来てくださいよ。ご馳走しますよ。  
スクルージ ふん。冗談じゃない。そんな用件ならお断りだね。帰っとくれ。  
フレッド そう言わずに。お待ちしてますよ、スクルージおじさん。それじゃよいクリスマスを！  
スクルージ ごめんだよ！ ふん、バカなやつだ。  
(効果音) (ノック、続いて「ギー」とドアの開く音。)  
紳士 ごめんください。スクルージさんはこちらですね？ あなた様のご親切が、貧しい人々の慰めとなりますように。この喜ばしいクリスマスの時に、温かいお心をちょうだいしたいと存じまして。  
スクルージ なんだ、寄付ですかい？ あいにくだが、こっちはそんな心なんぞ持ち合わせてないもんでね。  
紳士 いかほどでもよろしいんですが。  
スクルージ 断るね。「貧乏人は貧民院でも行くがいい」と伝えてやっどくれ。いっそ、野垂れ死にすれば、人口が減って助かるというもんさね。

ナレーション エブネゼル・スクルージは、この通りに事務所を構え、商売をしてひと財産築いているのですが、人柄はと言えば、お聞きのとおり。ですから、街を歩いても、「スクルージさん、ご機嫌よう」などと声をかけるものは、だれ一人いませんでした。

スクルージ クラシット、そろそろ閉めてくれ。

クラシット はい。…あの、スクルージさん。

スクルージ なんだね、クラシット？ まさか、「明日はクリスマス休みにしてほしい」なんて抜かすんじゃないかな？

クラシット 年に一度のことですから…。

スクルージ 全く、ドイツもこいつも浮かれおって。こっちは、クリスマス休みの分まで給料を払う義務はないんだからな。——仕方ない、じゃ、あさっては早く来るだろうね？

ナレーション 事務所をあとにして、スクルージは、少し離れた狭い裏通りの、古ぼけた部屋に帰りました。七面鳥やプディングのごちそうも、彼には関係ありませんでした。いつもどおりの夕食のテーブルに着こうとしたのです。ところがその時、突然「ガラガラッ」と不気味な、鎖を引きずるような音がしたかと思うと、なんとも言えず冷たい空気が漂ってきて、底に現れたのは…なんと幽霊でした。さすがのスクルージも、恐ろしさの余り声も出ません。すると幽霊は、ガタガタ震えている彼の腕をつかみ、どこかに連れていこうとします。不思議なことに、幽霊と一緒にだと、ドアでも壁でも通り抜けられるのでした。

スクルージ ゆ、幽霊様。あつしをどこへ連れていらっしゃるんで？ あ、ここは、この場所は知っております。あつしが子供のころ、よく遊んだ場所でさあ。あ、あれは?!

ナレーション スクルージは思わず息をのみました。向こうから来るのは、まだ少年の姿をした、スクルージ自身ではありませんか。

スクルージ どうして子供のあつしがここに？ 幽霊様、もしかしてこれは、過去の世界なんでしょうか？ そうですか。あのころのあつしは、陰気でふびんな子だったもんだ。

ナレーション そう言ってしみりと肩を落とすスクルージでしたが、そんなことにはお構いなしに、幽霊は、彼をまた次の場所へと導くのでした。

(効果音) (街の雑踏)

スクルージ(モノローグ) にぎやかなこった。そういや今日は、イヴだっけ。おや、この家は？ …そうだ、あつしが若いころに奉公していた屋敷でございます。幽霊様、でもどうしてここへ？ あ！ あつしがいる。仲間のディックもだ。そう、ここのだんなは人がよくて、奉公人たちは、クリスマスを楽しませてもらったもんさな。あれあれ、あつしがあんなにうれしそうにはしゃいでるよ。あのころは貧乏してたが、あのだんなのお陰で楽しかったわい。

ナレーション そうつぶやいてから、スクルージは、ハツとして口をつぐみました。今日の夕方、寄付金集めの男に言った、「貧乏人が野垂れ死にすれば人口が減ってよい」という自分の言葉を思い出したのです。

スクルージ(モノローグ) イヤなことを言っちゃったもんだ。

ナレーション こうして幽霊は、スクルージを連れて、徐々に年月を下り、若いころの彼、そして現在の彼を取り巻く人々を、こっそりとのぞいて回っていきました。

スクルージ 幽霊様、あっしは恐ろしゅうございます。自分がやってきたことを見せられて、愕然がくといたしました。幽霊様、これから見るのは、あっしの未来の姿でございますか？それなら、もう結構でございます。もう恐ろしくて…。

ナレーション けれども、そんな彼の声にはお構いなしに、幽霊が連れてきた所は、見慣れた街の通りでした。

男1 どうとうくたばったな。あのごうつくジジイめ。

女1 ええ。まあ、あいつが死んだのは世の中のためだったよ。どうせだれも悲しむ者はいないしね。

スクルージ なんだ？ だれが死んだんですって、幽霊様？ 死んでからもあんなひどいこと言われるなんて、一体どんなやつなんだろうな。おや、今度は裏通りのアパートの洗濯女たちだ。

女2 もうけものだよ、全く。あいつには散々イヤな思いさせられたから、残った家具や衣類を黙ってちょうだいしたって、罰は当たりやしないさ。

女3 そうさね。どうせだれも、葬式なんかに出やしないだろうしね。あいつの残した服やシャツだって、ボロよりはマシだからね。(笑い)

スクルージ(モノローグ) なんてえ嫌われ者もいたもんだ。一体そいつはどんなやつでしょうね、幽霊様。

ナレーション けれども幽霊は答えず、黙って彼を連れていった所は、町外れの墓地でした。

スクルージ ははあ、これがあの嫌われ者のやつの墓ですかい。どれ、なんて名のやつだ？……え！ こ、これは！……なんてこった。

ナレーション そうです。その墓には、「エブネゼル・スクルージここに眠る」とはっきり記してあったのです。

スクルージ これが、これがあっしの未来の姿ですか、幽霊様？ あんまりだ。この未来は、もう変えられないんでしょうか？ 今から改心して、良い行いをして、もうダメだってわけですか？ 幽霊様、あっしは今日から生まれ変わります。だからどうか、幽霊様…、あ、待ってください。幽霊様～～！

(音楽) (ブリッジ。場面転換)

スクルージ(モノローグ) ここはどこだ？ …あっしの部屋じゃないか。眠っちゃってたのか。それじゃ、さっきまでは夢？ いや、そんなはずはない。確かに幽霊と一緒に過去、現在、そしてあの恐ろしい未来の世界を見てきたんだから。しかし、あっし

は、もう生まれ変わったんだ。本当に目が覚めたさ。あんな未来になってたまるもんか。

(効果音) (鐘の音)

スクルージ(モノローグ) クリスマスの鐘だ。飛び切りのお祝いをしなくちゃ名。

(効果音) (街の雑踏)

スクルージ (道ゆく人々に) やあ、クリスマスおめでとう！ 元気かね？  
やあ、おめでとう。

女2 ちょっと、今のはあのスクルージじゃなかったのかい？

女3 確かにね。一体どうしちゃったんだろうね。あいつがあいさつするなんてさ。

ナレーション それからスクルージがやってきたのは、<sup>おい</sup>甥のフレッドの家でした。

(効果音) (ドアをたたく音)

フレッドの妻 はい、どなた？

スクルージ わしじゃよ。クリスマスの祝いに寄せてもらいに来たよ。

フレッドの妻 あらまあ、スクルージおじさん！ あなた、あなた～！ おじさんがお見えですよ。スクルージおじさんが！

フレッド やあ、おじさん。よく来てくれましたね。いやあ、本当にうれしいですよ。さあ、どうぞどうぞ。

(音楽) (クリスマス賛美歌)

ナレーション それからのひと時、スクルージがフレッドの家族と共に、それはもう楽しい祝いの時を過ごしたことは、言わなくてもお分かりでしょう。

それ以来、彼のもとに幽霊は二度と現れませんでした。そして彼は、周囲の人があきらめるほど、別人のようになったのでした。のちになって人々は、こう言いました。「スクルージこそ、本当のクリスマスの祝い方を知っている人だ」と――。

<完>